

松浦市文化財調査報告書 第7集

# 松浦市鷹島海底遺跡

平成27年度 発掘調査概報



2016

長崎県松浦市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、平成27年度に実施した鷹島海底遺跡発掘調査概報である。
2. 調査は、琉球大学法文学部教授池田榮史氏が研究代表者である日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(S)『水中考古学手法による元寇沈船の調査と研究』と連携し、琉球大学の調査後に松浦市教育委員会文化財課が国庫補助及び県費補助事業として実施した。
3. 調査及び本報告書作成にあたっては、池田氏をはじめ、多くの方にご指導ご協力を賜った。
4. 調査は、池田氏の指導のもと、國富株式会社長崎営業所に委託し、松浦市教育委員会文化財課課長補佐内野義、同鷹島埋蔵文化財センター主事合澤哲郎があたった。
5. 遺物の写真撮影は松浦市教育委員会文化財課長中田敦之があたった。なお、図版の縮尺は不統一である。
6. 本書で使用した写真は國富株式会社長崎営業所撮影分と合澤撮影分がある。また、表紙の沈没船俯瞰画像の撮影・編集は町村剛が行った。
7. 本書で用いている方位は磁北である。
8. 本書の執筆は内野があたった。
9. 本書にかかわる出土遺物は、松浦市立鷹島埋蔵文化財センター（松浦市鷹島町神崎免146番地）で収蔵・保管している。

## 本 文 目 次

第Ⅰ章	はじめに	1
	1. 蒙古襲来（元寇）と鷹島	
	2. 鷹島海底遺跡での調査	
	3. 国指定史跡「鷹島神崎遺跡」	
第Ⅱ章	平成27年度鷹島海底遺跡の発掘調査	3
	1. 調査の概要	
	2. 鷹島2号沈没船の発掘調査	
	3. 埋戻しとモニタリング	

# 第I章 はじめに

## 1. 蒙古襲来（元寇）と鷹島

鷹島海底遺跡は、長崎県本土北部、伊万里湾に浮かぶ鷹島の南岸海域に所在する蒙古襲来に関わる戦場跡である。蒙古襲来（文永・弘安の役）は、文永2年（1274）・弘安4年（1281）の二度にわたり元軍が日本に来襲し、鎌倉幕府瓦解の遠因となるなど、我が国の中世の政治・社会に多大な影響を与えた、日本史上著名な事件である。

鷹島は、『蒙古襲来絵詞』、『八幡愚童訓』等にその名が見え、鷹島沖は弘安の役の際に、元軍の船団が暴風雨により沈没した地点として伝えられており、島の南岸では、古くから地元の漁師によって壺類や刀剣、碇石などが海底から引き揚げられていた。

## 2. 鷹島海底遺跡での調査（第1図）

この鷹島沖における最初の発掘調査は、昭和55年度から3カ年にわたり、文部省科学研究費特定研究「古文化財に関する保存科学と人文・自然科学」（研究代表 江上波夫 古代オリエン特博物館長）の一環として行われた。鷹島南岸の沖合における調査の結果、床浪港と神崎港周辺において、鎌倉時代の陶磁器等が出土した。また、この発掘調査と同時に行われた地元住民が保管する採集品の調査によって、元の公用文字であるパスパ文字で書かれた「管軍総把印」が神崎港で採集されていたことも判明した。この調査成果に基づき、昭和56年7月には、鷹島の南岸東の干上鼻から西の雷岬までの約7.5km、汀線から沖合約200mまでの範囲、約150万㎡の海域が蒙古襲来に関係する遺物を包蔵する「鷹島海底遺跡」として周知されることになった。

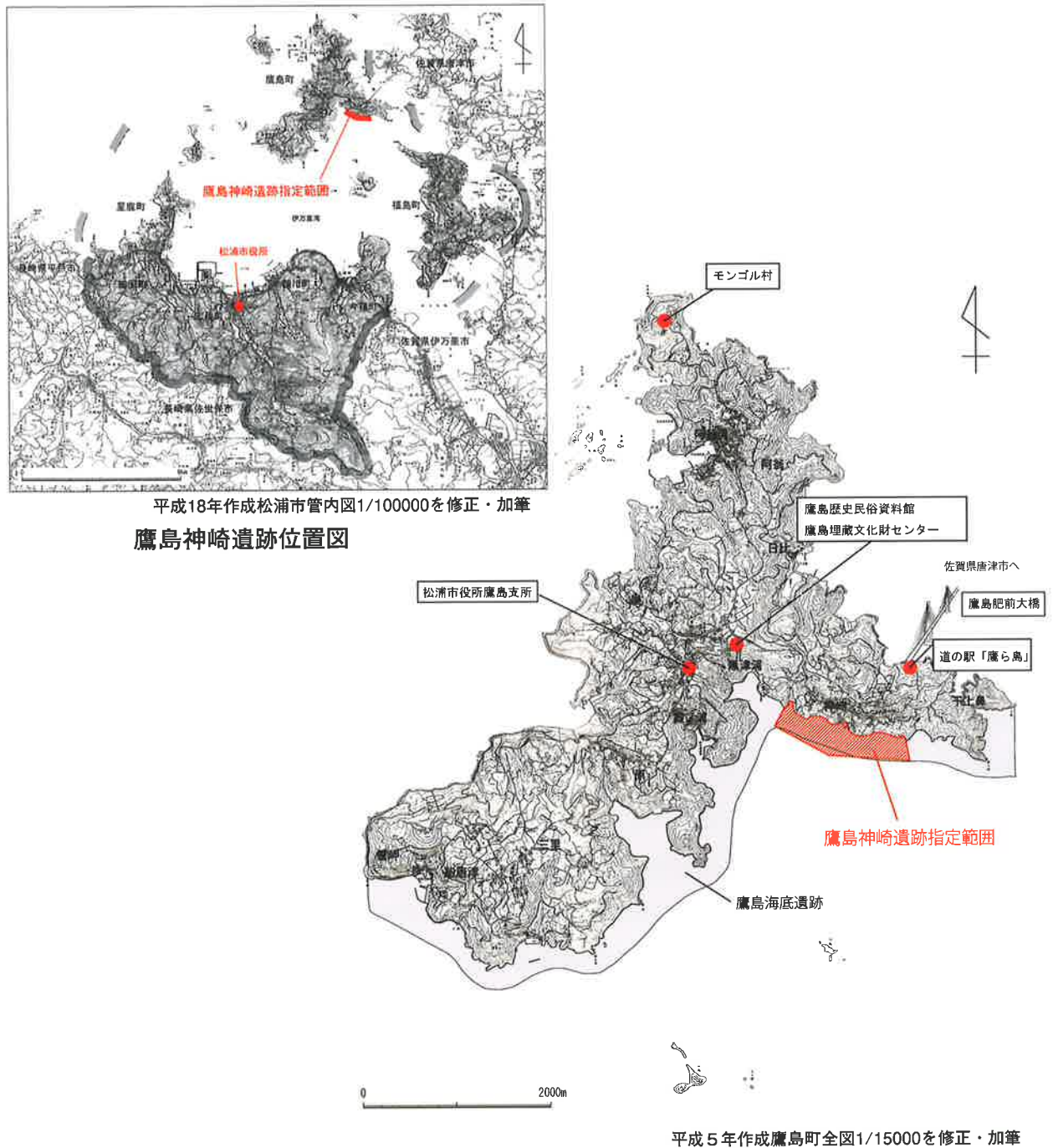
平成元年度以降は旧鷹島町教育委員会により、神崎港の沖合における遺跡の範囲を確認するための発掘調査等が継続的に実施され、遺物の分布範囲や埋没状況が明らかとなった。平成6年度の調査では、4つの木製碇の碇石がいずれも海底に食い込んだ状態で発見され、神崎港の沖合に船舶が停泊していたことが判明した。出土した遺物には、褐釉陶器、青磁碗、漆製品、矢束や刀剣、甲冑などの武器・武具類、碇石や船体の一部である木材などがある。陶磁器類の年代は、いずれも13世紀後半であり、元軍が出航した中国江南地方で作られた粗製品が大半を占める。また、『蒙古襲来絵詞』に描かれた「てつはう」と考えられる球状土製品が複数出土するとともに、武器・武具類も『蒙古襲来絵詞』に描かれている元軍の装備と類似しており、これらの遺物が弘安の役で沈没した元軍の船の積載品であることが確実となった。

## 3. 国指定史跡「鷹島神崎遺跡」

平成23年10月に琉球大学池田榮史氏を中心とした日本学術振興会科学研究費補助金による調査で、元の軍船の構造がわかる竜骨と外板が残る船底が発見され、「元寇の島」鷹島は再び大きな注目をあびるところとなった（この沈船を「鷹島1号沈没船」と呼ぶ）。平成24年3月27日には、これまでの調査・研究の成果から鷹島海底遺跡の一部である鷹島南岸東部の神崎港沖海域約384,000㎡が



「鷹島神崎遺跡」として海底遺跡では初めて国史跡に指定されている。「鷹島神崎遺跡」は、これまでの発掘調査によって、海底に元軍の沈没船が遺存し、また積載品の内容から武器をはじめとする各種道具の実態が判明する等、従来、文献・絵画によってしか知られなかった蒙古襲来という日本史上重大な事件を理解する上で欠くことのできない、きわめて重要な遺跡である。



第1図 鷹島海底遺跡及び鷹島神崎遺跡範囲図

## 第Ⅱ章 平成27年度鷹島海底遺跡の発掘調査

### 1. 調査の概要

本調査は、平成24年に琉球大学と松浦市の間で締結された「鷹島神崎遺跡に関する連携協定」に基づき、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(S)『水中考古学手法による元寇沈船の調査と研究』（研究代表者 琉球大学法文学部 池田教授）と共同して実施した。

調査に先立ち、平成17年度から琉球大学法文学部池田教授を研究代表者とする科学研究費補助金基盤研究及び本市教育委員会による調査が実施されている。この調査の特徴は、水中音波探査装置を用い詳細な海底地形図と海底地層断面図を作成し、海底面あるいは海底堆積層中から元寇関連遺物と思われる反射体の抽出を行い、水中考古学手法による発掘調査を行うものである。

本年度の調査は、平成25・26年度に浅層地層探査装置による異常反射体に対して実施した突き棒調査及び試掘調査により一部を確認した船体が元寇沈船であるか確認することを目的とした。調査期間は、科学研究費補助金に係る発掘調査が平成27年6月11日から6月19日まで、松浦市による発掘調査が平成27年6月22日から7月1日までである。

### 2. 鷹島2号沈没船の発掘調査（第2図）

調査地点は、鷹島南岸から沖合約200m、水深約15mに位置し、国史跡鷹島神崎遺跡の指定範囲東側に隣接する。平成26年度の試掘調査において一部を検出していた沈船について、残存状況と構造、周辺から出土する遺物を明らかにするべく、東西約8m、南北約17mの範囲を対象とした。

その結果、調査区域内において南北の方向に沿って船体を確認した（この沈船を「鷹島2号沈没船」と呼ぶ）。検出した船体の現存部分は、長さ約12m、最大幅約3mで、南側を船首、北側を船尾と推測している。

船体内部には、板材（隔壁）によって船体が仕切られており、この板材（隔壁）9か所とこれによって仕切られた空間8区画が確認できる。隔壁材の厚さは約9cm、外板材の厚さは約5cm、幅20～50cmの板材を用いている。

今回の調査では、船底部分までの掘り下げができなかったため、船底の竜骨にあたる部分の木材を確認していない。現存する船体の長さ12mの範囲に竜骨が収まっていると推測され、竜骨の2倍程度が全長となることを踏まえると、復元できる鷹島2号沈没船の全長は約20m、最大幅6～7mとなるものと想定される。この大きさは、平成23年に確認した鷹島1号沈没船の復元全長が27mであったことと比較すると、やや小型であると考えられる。

この沈船の発掘調査に際しては、船内堆積土や周辺から白磁碗、褐釉陶器壺、天目碗、磚、瓦、鉄製品など約20点が確認された。特に、白磁碗、褐釉陶器壺、天目碗などは中国産であり、貿易陶磁器研究では12～13世紀に位置づけられ、出土遺物の産地と年代により本沈船が元寇の際の沈没船であることを示している。

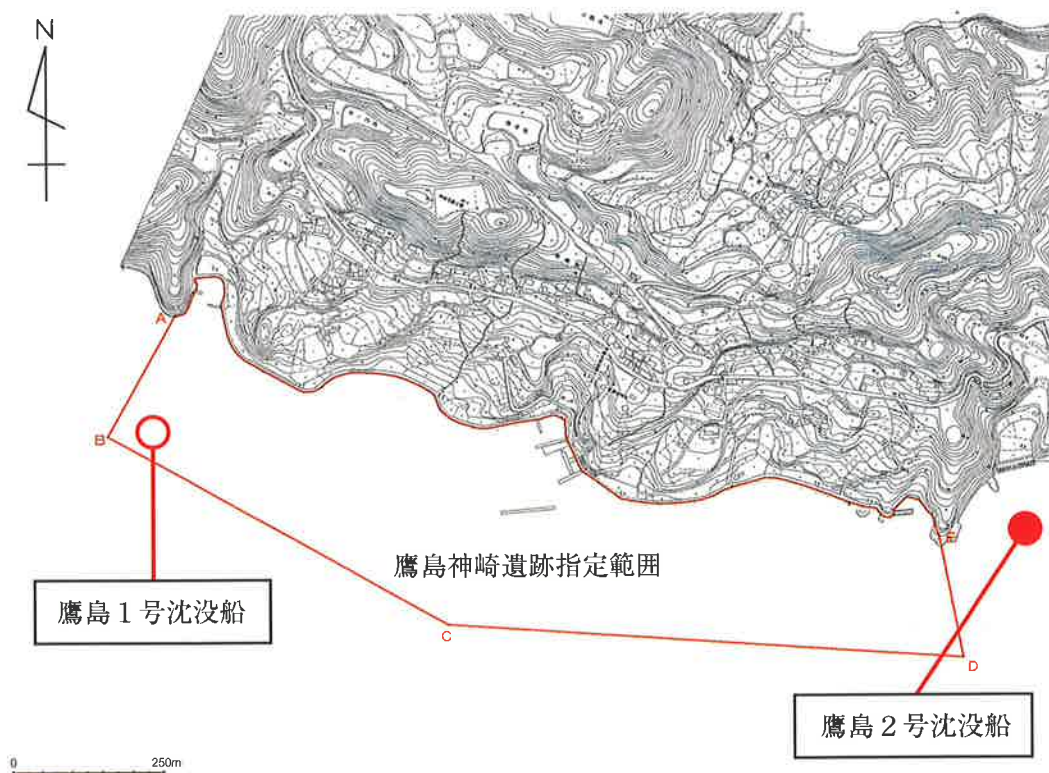
### 3. 埋戻しとモニタリング

発掘調査終了後は船体を現地で保存すべく埋戻しを行っている。船体を保存するにあたっては、材料として用いられている木材をいかに保存するかが課題となる。海底での木材の劣化に対してもっとも影響があるのは、二枚貝科の生物フナクイムシである。この対策手法として、フナクイムシの生存しにくい環境をつくることを検討し実践している。平成23年に確認した鷹島1号沈没船においては、北海道江差町で発見された開陽丸の保存方法を参考に、銅製の網で覆った上に砂嚢袋を乗せ、掘り下げた堆積土を埋め戻して保全している。銅製の網は海水と反応して銅イオンを発生させ、これが木材を蚕食するフナクイムシが嫌う性質を持つといわれている。

今回の鷹島2号沈没船の保存にあたっては、砂で埋め戻すことによって酸素を断つ方法をとった。埋め戻しには、砂嚢袋を厚さ約50cmに設置し、その上にシリコンをコーティングしたシートで覆い保全している。

現在、市では鷹島1号沈没船、一石型椀、鷹島2号沈没船の船材の劣化状況を把握するため、目視と触手によるモニタリング調査を定期的に行っている。現時点では、発掘後の埋戻し時から大きな変化は見られない。

また、科学研究費に係る事業として鷹島1号沈没船には、データロガー（照度計、酸素濃度計、塩分濃度計、水深計、温度計）が設置されている。鷹島2号沈没船については、データロガーの設置に加え、サンプルの木材（広葉樹のカシ、針葉樹のマツ）片を、船と同様に砂嚢袋で1m埋設しており、一定期間（最長20年を計画）ごとに引き上げる計画がなされている。



第2図 国史跡鷹島神崎遺跡指定範囲図及び鷹島2号沈没船調査位置図



### 写真1

#### 船首正面部分 南側より

船体の底部に数枚の外板が重なっており、船首部分に向かって狭まっていく木組みが残っている。



### 写真2

#### 船首正面 南東より

左舷の外板材の重なりが確認できる。



### 写真3

#### 船首右舷部分 南西より

1枚目の隔壁が確認できる。





#### 写真4

##### 船尾部分 南側より

船尾部分の残存状況はあまりよくない。直径約30cmの円筒状の木材と突出した外板材が2～3枚確認できる。



#### 写真5

##### 船首側1区画目 南側より

船体外板が3枚重ねて打ち付けられている。内壁面には垂木にみられるような小材の配置と、これを底板材2枚で抑えている状況が確認できる。

正面に、バラスト材と考えられる石材がある。



#### 写真6

##### 左舷船首より4番目隔壁付近 南側より

左舷外板材と20～50cmのバラスト材と考えられる石材が確認できる。

このバラスト材は、船体中央部に位置する南側から2～4番目の区画に確認できる。



### 写真7

右舷船首より7番目隔壁付近  
南側より

外板材が開いており、隔壁と  
の接合部分の痕跡が確認できる。



### 写真8

#### 遺物写真

褐釉陶器壺（左）

器高21.0cm

胴部最大径11.8cm

天目碗（中央）

器高5.0cm、口径10.6cm

白磁碗（右）

器高6.2cm、口径17.5cm



### 写真9

#### 実測風景

琉球大学池田教授による船体  
中央部での実測状況。水深は約  
15m。





**写真10**

**発掘風景**

水中ドレッジ(泥土移送装置)を用い、海底堆積層を掘り下げる。

海底面下約50~150cmで船体等を確認した。



**写真11**

**埋戻し状況**

砂嚢袋を厚さ約50cmに設置し、シリコーンコーティングしたシートで覆い保全している。



**写真12**

**鷹島1号沈没船**

**モニタリング状況**

鷹島1号沈没船の船材状況を目視並びに触手により確認している。確認に際しては、フナクイムシ対策として被覆してある銅網と泥を一時的に一部除去している(平成27年3月)。表面に劣化は見られなかった。

# 報告書抄録

ふりがな	まつうらしたかしまかいていせき							
書名	松浦市鷹島海底遺跡							
副書名	平成27年度発掘調査概報							
巻次								
シリーズ名	松浦市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第7集							
編集者名	内野義							
編集機関	松浦市教育委員会							
所在地	長崎県松浦市志佐町里免365番地 TEL. 0956-72-1111							
発行年月日	西暦 2016年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
たかしまかいていせき 鷹島海底遺跡	まつうらしたかしまちよう 松浦市鷹島町 こうざきめん 神崎免 ちさきこうゆうすいめん 地先公有水面	42208	49020	33° 25' 30"	129° 46' 36"	2015.6.22 ～ 2015.7.1	136	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
鷹島海底遺跡	包蔵地	中世			<ul style="list-style-type: none"> <li>・船（元寇船）</li> <li>・陶磁器</li> <li>・鉄製品</li> </ul>		標高-15m 発掘調査	

松浦市文化財調査報告書 第7集

## 松浦市鷹島海底遺跡

平成27年度 発掘調査概報

平成28年3月31日

発行 長崎県松浦市教育委員会  
長崎県松浦市志佐町里免365番地  
印刷 有限会社 タイセイ印刷  
長崎県松浦市志佐町



